

分担研究「小児の障害につながる傷病に 関する研究」の総括

分担研究者：大國真彦

要約：本研究班は本年度が3年目の最終年度になる。本研究班は昭和63年9月16日に第1回の、平成元年2月24日に第2回の研究班会議が開かれ、各班員の研究報告が行われた。

本研究班の主題は、小児の事故予防に関する研究と、小児肥満に関する研究の2つであり、前2年に引き続いての研究が行われた。

見出し語：

I. 小児の事故予防に関する研究

現在のわが国の小児の死亡原因の第1位は病死ではなく、事故死であり、とくに幼児期では事故死の占める割合が極めて大きい。したがって、小児の事故を予防することは、疾病予防とともに重視されなければならないと考えられるが、現時点では事故予防に関する研究も不十分であると考えられる。

本研究班においては、「如何にすれば幼小児の事故を妨げるか」を最終目標とし、研究を行った。

まず、予防法確立のためには事故の現状把握が重要であるが、死亡事故例の把握とともに死亡に

至らない事故の分析も重要と考えられる。

各班員は、まず保育施設における事故、家庭事故などの実態調査を行い、また救急外来からみた事故の現状についても調査が行われた。

さらに事故に対する母親の意識調査も行われ、事故防止システム確立のためには、多くの要因の検討が必要であることが示された。

また事故防止の一つの重要な方策として、幼小児の反射神経の鍛練が挙げられるが、どのようにすれば反射神経の鍛練ができるかを評価すべきシステムの確立なしには、鍛練法が確立されないところから、脳波を用いての検討も行われた。

この3年間の各個研究の抄録を後に掲げるが、

日本大学医学部小児科 (Dep. of Pediatrics, Nihon University School of Medicine)

小児の事故防止は極めて重要な問題であり、今後この方面の研究の継続により、小児の事故防止のための教育システムの確立が望まれるものである。

Ⅱ．小児肥満に関する研究

近年、わが国においては飽食時代を迎え、動物性脂肪のとりすぎと運動不足に起因すると考えられる肥満児が増加しており、なかには高度の肥満児もみられている。とくに幼児期の肥満は後に高度の肥満につながる例が少ないため問題になっている。

最近の小児成人病の増加が問題になっており、小児肥満もその危険因子の一つであるところから、小児期からの成人病予防を考えると、幼小児の肥満が重視されている。

従来、乳児の肥満判定にはKaup指数が用いられ、学童の肥満判定には東京女子医大・村田教授の開発による肥満度計算尺あるいはポケットコンピュータが用いられてきたが、今回は幼児の肥満度判定のための計算尺の開発が行われ、ほぼ試作品が完成した。

また幼児肥満の原因、実態に関する研究、肥満児の血清脂質パターンよりの成人病のリスク判定なども試みられつつある。

本研究班においては、小児歯科の専門医が加わっており、成人病につながる咀嚼能力に関する研究も行われている。

成人病の小児期からの予防は、21世紀に向けてのわが国における大きな問題であり、成人病予防システムの確立は今後の重要な課題の一つと考えられ、その方面の研究がさらに重ねられることが必要と考えられる。

↓ **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:本研究班は本年度が3年目の最終年度になる。本研究班は昭和63年9月16日に第1回の、平成元年2月24日に第2回の研究班会議が開かれ、各班員の研究報告が行われた。本研究班の主題は、小児の事故予防に関する研究と、小児肥満に関する研究の2つであり、前2年に引き続いての研究が行われた。